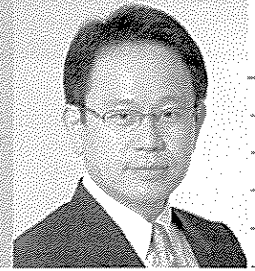


患者第一主義 “Placing the Patient First”

麻醉科学講座
教授 上園 晶一



“良い医者”になるためには、良い師匠、つまり尊敬できる医師を見つけることが必要だと私は思いますが、私の経験からすると、本当に尊敬できる先生に出会えるのはなかなか難しく、もし会えたなら、非常に幸運だということができます。私がアメリカのポストン小児病院で小児麻酔のフェロー（専門分野の研修医）をしていた頃に出会ったBerde先生は、私が最も尊敬する先生の中の1人です。この先生と一緒に仕事ができただけでも、ポストンで研修を受けた意味があったと思います。

Berde先生は、小児科、麻酔科、小児集中治療、ペインの4つの専門医資格を持ち、特に、小児の疼痛治療については世界的な権威として知られています。これだけの肩書きを見ると近寄りたがいがしますが、一緒に働いてみるとまったく偉ぶることがなく、教育熱心で常に頼りになる先生だということがすぐにわかりました。そう思うのは私だけでなく、同僚の麻酔科医、他科の医師、コメディカル、そして何よりも、患者とその家族から絶大な信頼を寄せられていました。実際、彼を必要とする人からの電話で、彼のポケベルはいつも鳴っていました。

ある日、そのBerde先生に、「なぜあなたは、そんなに患者や家族から信頼されているのか」と聞いたところ、私の肩をたたきながら、“I may not cure the patient, but I do care therefore I am. (自分は患者を治すわけじゃない、でも患者のことはいつも気にかけている、自分の存在意義はそこにある)”とおっしゃっていました。実際には彼は痛みのある患者を治療しているので、謙遜してそう言ったのだと思います。しかし、彼の言葉は「麻酔科医」という医師の本質をついています。たしかに麻酔という診療は、外科治療とちがって、治療行為ではありません。だからといって、麻酔科医は医療を施していないというわけではなく、むしろ、患者全体を診てケアしているのだというのがBerde先生の意図するところでした。彼は、麻酔科医としての強い責任感を、身をもって私に示してくれました。そして、患者に接するときの彼のポリシーというものを私に教えてくれました(ちなみに()は私の解釈です)。

1. 患者と話すときは、座って話す(患者と同じ目線で話せ)。
2. 身分証を常に身につける(自分が何者か患者に知ってもらえ)。
3. 毎日(自分の)患者を診る。
4. 患者に触れることを過小評価しない(ただ遠くから話すだけではだめだ。近寄って、脈を触れて、聴診器をあてよ)。
5. 意思決定の際に患者もできるかぎり参加させる(患者の権利を尊重せよ)。
6. 患者との約束は必ず守る。
7. 自分の言葉に責任を持つ(自分が軽く言ったことも患者はすべて覚えている。自分の言葉が患者にとってどんな意味を持つかを考えてから話せ)。
8. 患者の家族を意識する(患者には家族がいる。常にその家族のことも考えよ)。

Berde先生は、自分のポリシーを述べた後、「単純なことだろ、つまるところ患者第一主義(“Placing the patient first”)だ。簡単に見えるが実践するのは決して容易ではない。」とはっきりおっしゃいました。私はその口調の強さにびっくりしたことを今でも鮮明に覚えています。

私は今の職にあって、レジデントや初期研修医、学生と向かい合うとき、Berde先生のことをよく思い出します。Berde先生のように、患者のことを最優先に考えているか、それを実践することで若い人の手本になっているか、教育に対して情熱を持っているかを自問自答しては、恥じ入ることがまだまだあります。しかし、Berde先生がおっしゃったことを常に実践しようと心がけています。最近、慈恵医大麻酔科に入局する先生が増えています。ひとりでも多くの先生に、Berde先生の八か条を伝えるのが私の使命だと思っています。私が外来や病棟だけでなく手術室でも、いつもネームタグをつけていたり、聴診器を肌身離さず持っていたりするのはそういう理由からです。